

鳥インフルエンザの脅威

2007年 2月

山本利久

暫く鳴りを潜めていた鳥インフルエンザが1月に入り、宮崎県、岡山県で相次ぎ確認された。いずれのケースも毒性の極めて強い「H5N1」型であることが茨城県にある動物衛生研究所で確認され、全国的ショックが起きた。両県とも感染した鶏の大量処分を行うと共に、半径10キロ圏内にある養鶏場からの鶏、鶏卵の移動を全面的に禁止し、鳥インフルエンザの拡大阻止に向け鶏舎周辺の消毒作業の徹底を期している。

H5N1型のウイルスは極めて毒性が高く、感染した鳥は数日で死ぬ。しかし感染した鳥に素手で触るなど日頃から鳥との接触がなければ、人に感染する危険性はあまりない。更にウイルスに感染した鶏を十分に加熱処理すればウイルスが死滅するので、食べても感染の危険性はないと言われている。

その一方感染源の特定は渡り鳥などが有力視されているが、実証は容易でない。今回の宮崎県などのケースは中国内陸部に発生した鳥インフルエンザのウイルスに酷似していることなどから渡り鳥原因説も囁かれている。

世界各地で発見されている危険性の高いウイルスは「H5型」で、高病原性インフルエンザである。今のところ鳥から人への感染は報告されているが、人から人への感染例は確認されていない。鳥インフルエンザ(H5型)の発生が、世界で最初に確認され報道されたのが1997年の香港に於ける大量発生時であった。それから既に10年が経過している。幸いと言うべきか、多くの専門家の警告にも関わらず、これまでのところ人から人への感染は世界的に確認されていない。しかしながら多くの専門家や関係者はその発生は時間の問題だと指摘しており、各国がここ数年競って予防ワクチンの製造と備蓄に莫大な資金を投下しながら対応に追われている。

我が国は初期段階で対応に遅れを取ったが、現在2000万人分のワクチンを備蓄、今後更に500万人分を早急に製造すると報じられている。もちろんこうして用意されるワクチンも新型鳥インフルエンザ(ウイルスの遺伝子が突然変異を起こして人から人への感染するタイプ)の予防に果たしてどの程度有効か分からない。本当に効くワクチンは人から人へ感染する新しい鳥インフルエンザが実際に発生しなければ、その製造が出来ないのである。

国内の鳥インフルエンザ発生例

時期	発生場所	検査対象
2004年		
1月	山口県阿東町	3万4千羽
2月	大分県九重町	14羽
3月	同上	1万5千羽
2005年		
6月	茨城県常総市	568万羽
8月	埼玉県鴻巣市	10万羽

注：茨城県、埼玉県の発生例は毒性の弱い「H5N2 型」、それ以外は毒性の強い「H5N1 型」

出所：日経新聞 07.1.13

スイスの製薬会社が特許を持つ現在のワクチンはそうした諸々の課題を持ちながらも各国が懸命にその製造と備蓄に尽力している。2月上旬、日本の製薬会社3社がこれとは別のワクチンを鳥のH5N1から抽出し、そのワクチンの臨床試験を終え、現在厚生労働省に製造認可の申請を行っているとの報道を耳にした。今後の関係者の更なる研究成果に期待したい。20世紀に入り、これまで、鳥インフルエンザの猛威が最も強烈であったのが、1918年、第一次世界大戦終結の年に世界的大流行となったスペイン風邪である。世界中で数千万の人が亡くなったと伝えられている。この時のウイルスはH5N1型に比べると「毒性の弱い」ものであったと言われる。今回発生が心配される鳥インフルエンザのウイルスは「毒性の強い」タイプと見られ、世界的大流行となれば、当時とは衛生状態、医薬品、医療技術等が格段に進歩しているとは言え被害が甚大になりうることは容易に想像がつくであろう。

20世紀の新型インフルエンザ

種類	出現した年	ウイルスの型	世界の死者数(推定)
スペイン風邪	1918年	H1N1型	2000万～4000万人
アジア風邪	1957年	H2N2型	200万人以上
香港風邪	1968年	H3N2型	100万人以上

出所：日経新聞 07.1.22

厚生労働省は人から人へ感染する新型鳥インフルエンザが国内で流行する際に備え、国民に2週間分の食料を確保することなどを求める、と新聞は報じている。大流行を防ぐ方策として同省は外出を控えることの重要性を強調した。厚労省は国内で流行した場合、最大で国民の4人に1人にあたる3200万人が感染すると試算し、17万～64万人が死亡する恐れがあると想定している。

厚労省の新型インフルエンザ対策指針案(1月19日公表)

国・自治体レベル

- 感染者を隔離、家族などに投薬
- 地域封鎖など封じ込め策を感染者発生後72時間以内に決定
- 医療機関に「発熱外来」を設置

個人・家庭レベル

- うがい・手洗いの励行
- 食料・水などの備蓄(2週間分)
- 外出を極力控える

企業・職場レベル

- 新型インフルエンザ流行時の事業運営体制の検討
- 必要に応じた事業の縮小、従業員の自宅待機
- 重要でない会議の中止・延期、電話・テレビ会議の活用

° 感染国にいる従業員や家族の退避、海外出張の是非を検討

出所：日経新聞(07.1.20)の転載

この指針の有効性については、疑問視する向きもあるが、家庭でも 1 ヶ月分位の備蓄を心掛けるべきであろう。

今回アジアで始まった鳥インフルエンザは、既に東南アジア、中国などで犠牲者が出ている。世界保健機構(WHO)のチームは鳥インフルエンザウイルスの中で人に感染しやすいタイプに遺伝子が変わったウイルスを新たに複数発見した。インドネシアで広がっている鳥インフルエンザに感染した患者から相次いで見つかった。それが人から人へうつる新型インフルエンザの原因ウイルスに変貌しないか、世界が注視している(日経新聞 06.10.23)

鳥インフルエンザ(H5N1 型)による主な国の死者数

	国	死者数
1	インドネシア	48
2	ベトナム	42
3	タイ	16
4	中国	14
5	カンボジア	6
6	エジプト	6

注：WHO 調べ、06 年 9 月 8 日時点

日経新聞(06.9.12)から転載

次回の大流行は 1918 年の再来か？(タイム誌(05.9.26)の抜粋要約)

『フィラデルフィアでは死体が馬車に積み街中を通り、市外に運び出されるまで数日間もかかった。ケープタウンでは、棺が底を尽き死体は毛布に包まれ共同墓地に埋葬された。何千人ものアメリカ兵が輸送船上で死亡、生存者への感染を防ぐため大西洋に捨てられたが、それでも感染は収まらなかった。仮にこのままの事態が続けば、「文明は数週間の内に簡単に消滅してしまう」と、米国の著名な公衆衛生の高官が述べている。

恐らく世界の人口の 30%以上がスペイン風邪に感染し、その内 1 億人位が死亡した模様である。発生後 24 週間で、エイズでこの 24 年間に死亡した以上の生命をスペイン風邪は奪ってしまった。

インフルエンザは通常幼児や高齢者だけを襲うが、1918 年には 20~40 歳までの人々が最も感染し易かった。これは、スペイン風邪が、弱性のインフルエンザと異なり、明らかに致命的な過剰反応を身体の防御機能が引き起こすためと見られているからだ。つまり免疫細胞がウイルスを破滅しようと感染した組織を粉々にしてしまう。

1918 年のウイルスの異常な猛毒性は、第一次世界大戦と言う大変特異な騒乱状態の中で進化したと言う事実に起因している可能性がある。

鯨詰め、非衛生的な条件下で、何万人もの兵士が輸送船、塹壕、病院に押し込まれた。このことがウイルスのような捕食者を増長させ、結果として強力な感染力を発揮したので

あろう。兵士達は齧詰め状態で病死したため、病床からさえ、猛毒性のウイルスを尚伝染できたのである。

1957年と1968年の流行性ウイルスは、1918年型と同様の伝染力を有していたが、それは対照的に、遙かに弱いものとなり、英国での1968年におけるインフルエンザの死亡者数はその前年より少なかった。ルイジアナ大学の進化生物学者、Paul Ewald は次のように述べている；「私は1918年のような大量死を伴う大流行を見ることは二度とないと思います。仮にH5N1型が人から人へ転移を始めたとしても、私はそれが毒性の弱いものに進化すると思います」これに対し、悲観論者は尚最大級の警鐘を鳴らしている。』

私事になるが、私は長年庭に来る小鳥に、パンくず、大豆、チーズなどの餌を与えていた。慣れてくると、ヒヨドリなどは毎朝私が雨戸を開ける音を聞きつけ、大きな鳴き声をはっしながら集まり盛んに餌を啄ばんでいた。以前二階の戸袋に家人の知らない間に巣をかけた雛を孵したことも2,3度あった。

世間で鳥インフルエンザが話題になりだした数年前から、私は鳥に餌を与えることを止めてしまった。小鳥たちとの触れ合いが出来なくなることは大変残念であるが止むを得ない。ヒヨドリは留鳥だが、我が家には今ジョウビタキがやって来て庭の木々や鉢にとまりセキレイのように尾をふり一頻り遊んでゆく。羽に白の紋をつけたスズメほどの小鳥だが、見事な色彩の愛くるしい鳥である。冬に北国からはるばるやってくる渡り鳥である。餌がなんだか分からないが、時折芝生に降りて何か食べているようだ。

秋口に大挙して近所に飛来したムクドリの群れは10日ほど喧騒を撒き散らした後、何処かへ行ってしまった。これからの季節、例年だと鶉が凜とした美しい姿で飛来し、芝生の虫を探す。寒い冬を避け、遙か遠い大陸の何処からかやってくるのであろう。渡り鳥の観察はロマンを駆り立てる。

毎年10種以上の鳥たちが我が家の狭い庭を訪れる。それを観察するのが私の楽しみであるが、近年飛来する小鳥の数や種類が少し減っているように思えて気になっている。鳥インフルエンザは元々は鳥の病気であるが、人に感染するとなると放置は許されない。早く飛来する鳥達に餌を与えることが出来る時期がまたやって来て欲しいと願っている。

これまで人類は様々な感染症の脅威に曝されてきた。1930年前後に飛躍的感染を起こしたエイズ(AIDS)はチンパンジーの持つウイルスに起因するものである。また重症急性呼吸器症候群(新型肺炎)サーズ(SARS)は2002年に蝙蝠或いはジャコウネコからもたらされたことになっている。いずれの場合でも、WHOを初め世界各国による監視体制と継続的モニタリング並びに情報開示のための国際協力も欠かせないことは言うまでもない。

世の中は相変わらずのペット・ブームに湧いている。この機会に人類は改めて身近な動物達との暮らしを感染症の視点からも見直す必要があるようだ。

完